

埋文群馬

MAIBUNGUNMA



—全国初よろい甲よろいを着た古墳人発見—

最新レポート『かないひがしうらいせき金井東裏遺跡』

速報



話を聞く地域の小学生



作業は慎重に...





金井東裏遺跡は、渋川市金井字東裏にあります。遺跡の近くを流れる吾妻川の右岸に立地し、標高は230mです。

金井東裏遺跡の周辺にはどのような古墳時代の遺跡があるのか見てみましょう。

遺跡の近くには、古墳時代の集落遺跡の^{※2}金井城跡遺跡や^{※3}下新田遺跡などがあります。

また、利根川右岸にある^{※4}中村遺跡や^{※5}有馬条里遺跡、^{※6}有馬遺跡からは、6世紀初頭の榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)に覆われた水田や畠跡などが確認され、^{※7}中筋遺跡(県史跡)からは、火砕流に埋没したムラが発見されています。吾妻川左岸には、6世紀中頃の榛名山二ツ岳軽石(Hr-FP)に覆われた^{※8}黒井峯遺跡(国史跡)が存在します。

古墳では、遺跡の南西100mに^{※9}金井丸山古墳があります。墳形や規模は不明ですが、^{※10}竪穴式石槨から^{※11}剣3点、^{※12}毛抜状鉄製品1点が出土しました。年代的には「^{※13}甲を着た古墳人」を若干先行する時期の古墳といえます。

また、5世紀中頃から後半にかけての初期の群集墳が^{※14}行幸田山遺跡・^{※15}空沢古墳群・^{※16}東町古墳・^{※17}坂下町古墳群・^{※18}大崎古墳群などで確認されています。円墳や方墳や積石塚で、^{※19}竪穴式の石槨を埋葬施設としています。横穴式の石室が導入される前の古墳がこの地域に集中して築かれていることがわかります。積石塚や^{※20}韓式系土器など朝鮮半島系の文化との関係が考えられる遺物も出土することから、馬の飼育等の最新技術を持った渡来系の人々たちが存在していたことが想定される地域でもあるのです。(主任調査研究員 杉山秀宏)



図1 金井東裏遺跡位置図(国土地理院5万分の1前橋 榛名 沼田 中之条)

- | | | | |
|-----------------|------------------|------------------|------------------|
| ① 金井東裏遺跡(渋川市金井) | ⑤ 有馬条里遺跡(渋川市八木原) | ⑨ 金井丸山古墳(渋川市金井) | ⑬ 坂下町古墳群(渋川市坂下町) |
| ② 金井城跡遺跡(渋川市金井) | ⑥ 有馬遺跡(渋川市有馬) | ⑩ 行幸田山遺跡(渋川市行幸田) | ⑭ 大崎古墳群(渋川市大崎) |
| ③ 下新田遺跡(渋川市金井) | ⑦ 中筋遺跡(渋川市行幸田) | ⑪ 空沢古墳群(渋川市行幸田) | |
| ④ 中村遺跡(渋川市中村) | ⑧ 黒井峯遺跡(渋川市北牧) | ⑫ 東町古墳(渋川市東町) | |

埋文群馬No.57 特集 金井東裏遺跡 目次

金井東裏遺跡のあるところ	杉山秀宏…… 2	これが“甲を着た古墳人”だ	徳江秀夫…… 6
ドキュメント 発掘から移送まで			
金井東裏遺跡の発掘調査『甲を着た古墳人』発見	宮下 寛…… 3	金井東裏遺跡を襲った火山災害	坂口 一…… 8
3000人の目撃者 ～遺跡説明会の記録～	宮下 寛…… 4	特別寄稿	
取り上げから移送へ ～1.8トン移送大作戦～	関 邦一…… 5	金井東裏遺跡の時代背景と調査の意義	右島和夫……10
		あらたな古墳時代像がみえてくる	桜岡正信……12

表紙の写真

●発掘調査スタート

金井東裏遺跡の発掘調査は、国道353号金井バイパス(上信自動車道)の建設工事に伴い、平成24年9月からスタートしました。

表土を約50cm掘り下げると6世紀中頃の榛名山噴火による軽石(Hr-FP)が2m堆積しています。この軽石を丁寧に除去すると古墳時代の地表面が現れ、馬蹄痕が多数検出されました。

さらに、その下層には6世紀初頭の榛名山噴火による火山灰(Hr-FA)が約10cm～50cm堆積し、この火山灰下からは畠の跡が確認されました。

なお、これまでの発掘によって古墳時代や弥生時代の住居などが10軒以上確認されています。

●“甲を着た古墳人”発見へ

11月下旬から31号溝の調査開始。東西の方向に延びるこの溝は、幅約2m、深さ約1mで、未調査部分を含めれば長さ20m以上にもなります。溝は6世紀初頭の榛名山二ツ岳の火砕流堆積物で埋没していました。掘り進めていくと、錆びた鉄の塊の一部が現れたのです。古墳時代の鉄製の遺物となれば、それだけで重要なものと考えなければなりません。緊張感につつまれながら周囲を慎重に掘り下げると驚くことに“人骨”と思われる骨の一部が姿を現したのです。「甲を着けた人骨」かも知れない。衝撃の調査成果を本部へ通報。そこからは関係機関との調整、専門研究者の指導、調査方法の検討などとともに、報道機関への発表、そして遺跡説明会の開催、とジェットコースターのような日々の連続となりました。

(主任調査研究員 宮下 寛)

発掘調査が進む金井東裏遺跡。住居や溝などが確認されている。ブルーシートで覆った土層断面には火山灰層が厚く堆積している。



調査が進む31号溝。溝の中央に見えるのが“甲を着た古墳人”。その手前に別の甲も出土した。



“甲を着た古墳人”を慎重に調査する。世紀の発見に調査員も緊張のなかでの作業が進む。



31号溝からは乳児とみられる頭骨も姿をあらわした。新たな発見は次々に謎をよぶ。

金井東裏遺跡の発掘調査
「甲を着た古墳人」発見



3000人の目撃者
遺跡説明会の記録

●「甲を着た古墳人」全国へ発信

12月に入ると霜が降るほどの寒気につつまれ始めました。脆弱な鉄製の甲と人骨を保護しながら出土状況を記録し、早急に取り上げる必要に迫られました。同時に発見されたままの姿をできるだけ多くの人に見てもらうためにどのように公開するかも緊急の課題となりました。

そして12月10日報道機関への発表、12日午前10時から遺跡説明会という計画が立てられたのです。さらに、13日からは「甲を着た古墳人」をそのまま切り取り、埋蔵文化財調査センターへ移送し室内で詳細な調査を進める、という方針が確定したのです。

12月10日午後1時30分、報道機関を対象に現地で公開発表。翌11日には新聞、テレビ、ラジオなどにより「甲着裝人骨発見」のニュースが全国に発信され、遺跡説明会を12日に行うことも報道されたのです。

報道とともに事業団本部には問い合わせの電話が殺到、あらためて関心の高さに気が引き締まる思いでした。

説明会へ向けパンフレットの作成、写真パネルの準備、見学通路の確保、見学者用のヘルメットの用意、金島ふれあいセンターと金島中学校に駐車場の協力依頼など時間に追われるなか、あっという間に当日を迎えることになりました。

写真1 12月12日遺跡説明会。コースに沿って1500年前の「甲を着た古墳人」と対面する見学者。「感動した」「ホンモノが見られてよかった」との感想や説明への期待感も寄せられました。



写真2 金島小・中学校の全児童・生徒の見学を13日に実施。クラスごとに担当職員の説明を聞きながら、見学しました。

●大盛況の遺跡説明会

12日は風もなく晴天に恵まれ、絶好の遺跡説明会日和となりました。10時開始予定でしたが、9時には事務所周辺が見学者であふれたため、時間を早めて説明会開始。11時頃には、約100台分の駐車場が満車となるほど多くの方々であふれかえることとなりました。

行き交う車は東北や関西のナンバーもあり、金井東裏遺跡の反響の大きさを実感しました。

500部のパンフレットはすぐになくなり、印刷を繰り返すことになりました。

甲を着た古墳人は、地表面から2.5m掘り下げた場所にあるため、ヘルメットを着用しての見学となります。開始から行列は途切れることがなく、平日にもかかわらず2,600人を超える見学者があり大盛況の1日となったのです。

●金島小・中学生も目撃者に

「地元で発見された甲を着た古墳人を子どもたちにぜひ見せたい」という金島小学校および中学校の先生方の希望で、13日に見学会を開催しました。小学校1年生から中学校3年生と先生たちおよそ500人が順次発掘調査のようすや出土遺物を見学、甲を着た古墳人と人骨が出土した状況などの説明に耳を傾けました。

●3,000人の目撃者

2日間で約3,000人以上が金井東裏遺跡から出土した国内初の「甲を着た古墳人」の目撃者となったのです。

皆さんの期待の大きさを調査員一同実感した2日間となりました。

(主任調査研究員 宮下 寛)

● 取り上げへ

甲よろいや人骨は1500年の時を経て非常にもろい状態になっていました。そのため急激な乾燥や寒気のなかでは劣化してしまうため、全体を取り上げ室内に移送し、その後に詳細調査を行うことになりました。

取り上げは、周囲を掘り下げ土層から切り離し、そのブロックのまま硬質発泡ウレタンで保護梱包し搬出する方法です。この作業には元興寺文化財研究所の専門スタッフの協力を得ることとなりました。

発泡ウレタンは住宅の断熱材としても使用される資材で、二種類の薬剤を混ぜ合わせることで急速に膨らみながら硬質なスポンジ状に固まります。この発泡ウレタンを吹き付け、土のブロック全体を覆い保護します。ただし、甲を着た古墳人は土ごと切り取ると総重量が2トンにもなると推定されたため、切り離す際には鉄骨で補強することにしました。

● いよいよ取り上げ開始

取り上げ作業にあてられた時間は12月13・14日の2日間。まず範囲を決定しまわりを掘り下げていきます。そして甲や人骨の表面をアルミ箔などで保護し、発泡ウレタンを吹き付けていきます。さらに周囲を深く掘り下げ、その土の周りにもウレタンを吹き付け梱包。掘り下げる作業、ウレタンを吹き付ける作業ともベテラン職員が慎重に進めていきます。掘り下げるほど土は硬く、さらには大きな石があったりなど作業は困難を極めました。それでも下部に鉄骨を差し込み発泡ウレタンを注入し補強。そして最後には10本の鉄骨で下側を支え地面から見事に切りはなし、取り上げられたのです。早朝から続いた作業は、夕暮れの中で無事完了しました。

● 遺跡からセンターへ

すっかり暗くなった午後6時。発泡ウレタンで保護された甲を着た古墳人は、調査関係者と地元の人々が見守る中、サーチライトに誘導されながらクレーンでゆっくりと吊り上げられ大型トラックに積み込まれました。そして、先導車、トラック、後続車の車列が国道17号を南下。1500年の時を経て金井東裏遺跡から渋川市北橘町の群馬県埋蔵文化財調査センターに移送されたのです。

総重量1.8トンの移送大作戦が無事成功しました。
(補佐(統括) 関 邦一)

取り上げから移送へ
1.8トン移送大作戦

1 甲と人骨が丁寧に保護されていく。



2 完全に保護された甲と人骨。いよいよウレタンの吹き付けだ。



3 発泡ウレタンで梱包された甲と人骨。切り離すのため底を掘り進む。

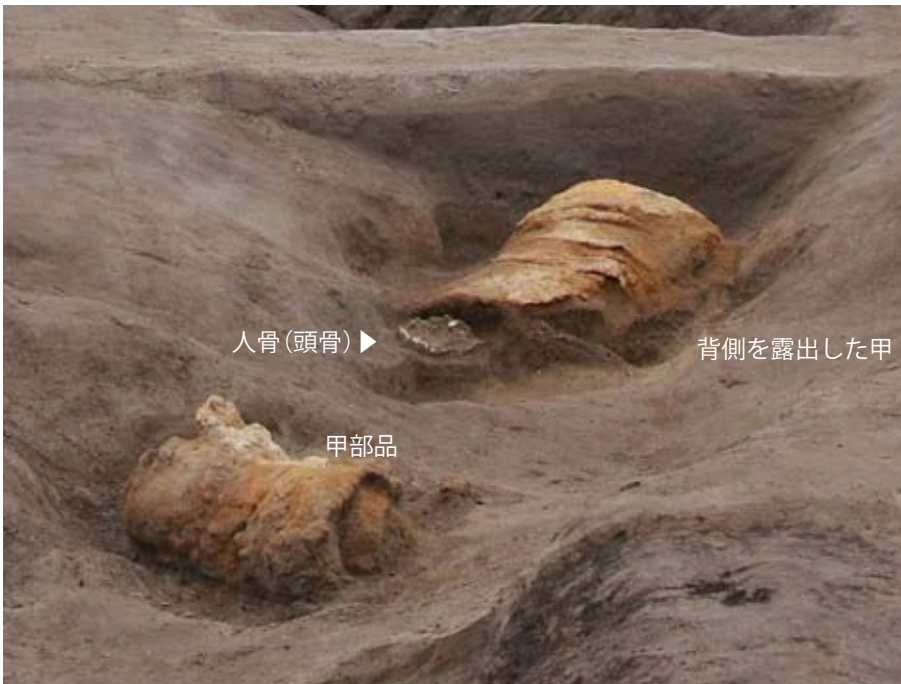


4 クレーンでつり上げられた瞬間。すでに暗くなったが、一斉に歓声があがる。



さて、これから調査方法や調査計画を練り上げながら解明へのスタートラインに立ったこととなります。
これからもぜひご期待ください。

これが“甲を着た古墳人”だ



▲写真1 溝の中から発見された甲を着装した人骨と甲部品



▲写真2 甲を着装した人骨の出土した様子

火砕流の中から発見

甲を着装した人骨や乳児頭骨などはいずれも6世紀初頭の火山灰で埋没した31号溝の中から発見されました。

甲を着装した人骨の西側に1m離れてよろいの部品1点が、東側に3m離れて、乳児頭骨が見つっています。(写真1)。いずれも同じ火砕流堆積物で埋没していることから、同時に被災していることがわかります。

人骨とよろいの特徴

甲を着装した人骨は、頭蓋骨、左上腕骨・大腿骨などが認められ、ほぼ全身が残っているようです。骨格の状況から成人男子と判断されます。西を向き、顔を伏せ、足の骨の状態から膝立ちのような姿勢のまま前方に倒れたものとみられます。(写真2・3)。

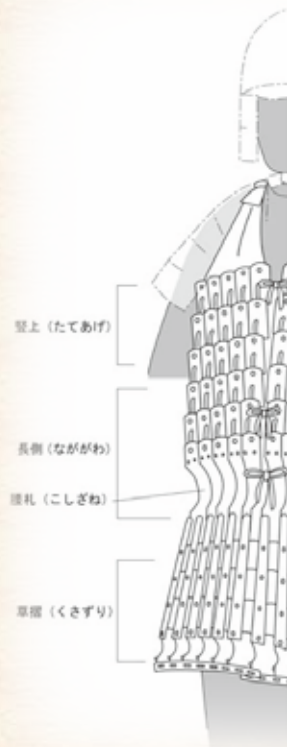
古墳時代の甲には幅の広い鉄板を革紐でつなぎ合わせたり、鉷で留めたりして作る「短甲」と、小札と呼ばれる縦長の小さな鉄板どうしをつなぎ合わせて作る「小札甲」があります。

火砕流が発生した6世紀初頭は短甲から小札甲に切り替わる時期にもあたります。

甲の破片の断面を観察したところ、長さ5cm前後、幅2cm、厚さ1mmの小鉄板が複数枚重なり合う様子や鉄板に小さな孔が開いていることがわかりました。このことから、この甲が「小札甲」であることがわかりました。

甲は背中側を上にして出土しました。高さ60cm、幅50cmとやや寸詰りの状態ですが、これは太ももを保護する草摺くさずりの部分が胸部をおおう長側なががわの方向にずり上がったためと考えられます。近くから鉄製の矢尻やじりが10数本発見されましたが、小札甲の付属品の冑かぶとや肩甲かたよろいは見つかっていません。

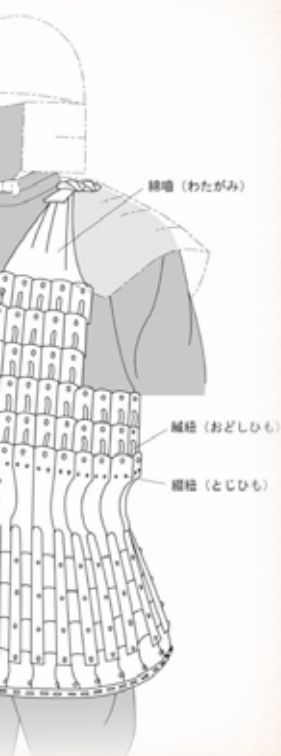
よろいを装着した人骨の西側で出土したよろいの部品は、表面の腐食が激しいことからの部分にあたるのか、どのような構造をしているのかは現段階では不明です。



▲図1 小札甲の復元図



▲写真3 甲の下位から出土した大腿骨の様子



小札甲とは

小札甲(けいこうとも呼ばれる)は、図1に見るように小札に開けられた綴孔やおどしあなと呼ばれる小さな孔に革紐や組紐を通して、横方向に綴じた小札の板を10数段分、上下方向に編し(上下につなが)て、胸や胴部をおおうの^{たてあげ} 豎上(胸と背中の上半部)や^{ながかわ} 長側(胴部)から^{くさずり} 太腿部分の草摺までを一体に組み上げたものです。一つの小札甲の製作に必要な小札の数は、10世紀初めに編さんされた『延喜式』に800枚と記録されていることが参考になります。

前開きになっていて、着用する時は、正面で左右に引き合わせて紐で結び、胴部上辺の両肩の位置に前後に付けた布製または革製の綿嚙^{わたがみ}を結んで肩で支える構造となっています。

小札甲は、5世紀後半に製作がはじまり、6世紀になると短甲と入れ替わり、甲の主流となっていきます。

小札甲は伸縮性に富み、それまでの短甲と比べて動きやすく、乗馬にも適した最新の武具だったのです。

小札甲は、古墳に副葬されるものが大半で全国の約290基の古墳から発見されています。しかし、実際に人物が着装した状態で発見されたのは金井東裏遺跡が初めてのことです。

群馬県内で発見された小札甲

群馬県内では、5世紀後半以降、前方後円墳などからこれまでに54点が出土しています。これは近畿地方での出土数よりも多く、全国最多となるものです。

小札甲は大和政権のもとで製作され、各地に配布されました。群馬県での出土数の多さは、大和政権との間に密接な関係が作り上げられていたことを示していることとなります。

金井東裏遺跡に前後する時期の古墳で小札甲が出土した古墳は、前方後円墳を主とした有力な古墳に限られています。このようなことから、謎に包まれたよるい着装人骨の人物像が思い描けるのではないのでしょうか。

(上席専門員 徳江秀夫)

金井東裏遺跡を襲った火山災害

火砕流の中から発見

榛名山は古墳時代後期の6世紀代に2回の大きな噴火を起こし、県内外の広い範囲に火山灰を降下させました(図2)。なかでもその東麓にあたる渋川市周辺には火山灰が厚く堆積し、これは皮肉にも遺跡を良好な状態で保存する結果をもたらしました。とりわけ6世紀中頃の噴火による榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)は、給源から北東の方向に大量の軽石を降下させました。渋川市(旧子持村)・黒井峯遺跡は当時の集落が厚さ2mの軽石層で埋没し、火山灰で埋没したあり様がイタリアのポンペイ遺跡に例えられ、日本のポンペイとも呼ばれています。

この黒井峯遺跡を埋没させた6世紀中頃の噴火に先立つ6世紀初頭に、榛名山は最初の噴火を起こしています。榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)と呼ばれているこの火山灰が、金井東裏遺跡の甲を着けた人物を埋没させた火山灰です。金井東裏遺跡では、Hr-FA、Hr-FPの2回の噴火によって堆積した火山灰層が明瞭に認められますが、その様子を詳しく見てみましょう。

給源から8.5kmに位置するこの遺跡では、厚さ約30cmの現代の畑耕作土があり、この下位が厚さ2mの白色軽石層となります(図1)。この軽石層がHr-FPで、6世紀中頃の榛名山の噴火によって堆積したものです。この軽石層の下位は厚さ5cmほどの黒褐色土を挟んで、厚さ30cmの火山灰となり、この火山灰がHr-FAで、6世紀初頭の榛名山の噴火によって堆積したものです。

Hr-FAは、甲人骨が出土した溝の中に大量に堆積しています(写真1)。溝の中は吹き溜まりとなるため、平坦な場所より多くの火山灰が堆積したのです。特に最初のマグマ水蒸気爆発の後に起きた火砕流は、おそらく給源からいく筋かのルートでこの周辺を襲い、吾妻川を越えて対岸の旧子持村まで達しています。

火山災害で有名なイタリアのポンペイ遺跡は、紀元79年のヴェスビオ山の噴火で壊滅した古代ローマ都市です。給源から9kmに位置しており、その距離は金井東裏遺跡とほぼ同じです。厚さ5mの火山噴出物で埋没したがそのほとんどは軽石で、軽石噴火の後に起きた火砕流が街に深刻な被害を及ぼしました(写真2)。ちなみに、噴火の始まりから終息までは、僅かに19時間と推定されています。



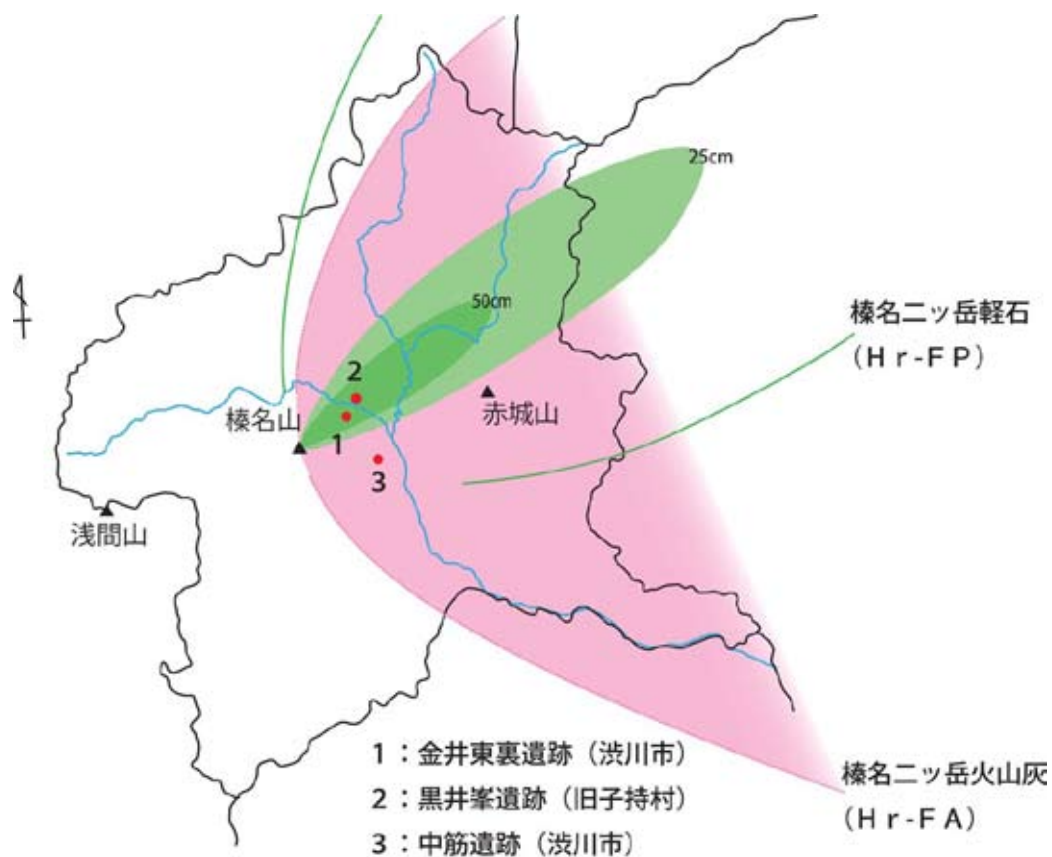
▲図1 金井東裏遺跡の土層柱状図



▲写真1 金井東裏遺跡 溝の中の火山灰層



▲写真2 イタリア・ポンペイ遺跡の火山灰層



▲図2 榛名山ニツ岳火山灰の降下範囲図

榛名山ニツ岳の火山灰

●榛名山ニツ岳火山灰(Hr-FA)

古墳時代後期の6世紀初頭に噴火した、榛名山ニツ岳の火山灰。細粒の火山灰、火砕流堆積物、軽石などからなる15層のユニットが確認されています。金井東裏遺跡では、約30cmの堆積が認められます。給源から東～南東の方向に火山灰を降下させ、東側は栃木県宇都宮市、南東側は埼玉県鴻巣市で確認され、それぞれ給源から約100kmの距離にあります。県指定史跡の中筋遺跡(渋川市)は、この火山灰で埋没した集落遺跡です。

●榛名山ニツ岳軽石(Hr-FP)

古墳時代後期の6世紀中頃に噴火した、榛名山ニツ岳の軽石。主に軽石からなる19層のユニットが確認されています。金井東裏遺跡では、約2mの堆積が認められます。給源から北東の方向に軽石を降下させ、最も遠い地点では宮城県多賀城市で確認され、給源からの距離は約300kmに達します。国指定史跡の黒井峯遺跡(渋川市・旧子持村)は、この軽石で埋没した集落遺跡です。なお、ニツ岳はこの噴火の後に出てきた溶岩ドームです。

(調査2課長 坂口 一)



(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 理事 右島和夫

今回の甲を着た古墳人の発見は、古墳時代の^{かみつげぬ(の)}上毛野地域(現在の群馬県地域に近い)や東国(現在の関東地方に近い)にとどまらず、日本列島・東アジアの歴史を考えていく上でも重要な問題を提起していると言えます。そこで、ここでは金井東裏遺跡の地から具体的にどのような歴史の広がりへとつながっていく可能性があるのかを考えてみたいと思います。

甲を着た古墳人をめぐる諸特徴

最初に、金井東裏遺跡をめぐる注目点について簡単に整理しておきましょう。

甲着装の人物が榛名山噴火の犠牲になったのは、6世紀初めのことと考えられています。これを九州大学の人骨専門家である田中良之氏が最初に見たときの感想によると、老人の域には達していない成人男性の可能性が高いとのことでした。もちろん実際には、今後予定される本格的な調査検討をまつ必要があります。いずれにしても、この男性が生を受けて活躍していたのは、5世紀後半の頃と考えてよいかと思えます。

発見された男性が甲を着装していたということは、最も大きな特徴と言ってよいでしょう。その場合、これが^{こざねよろい}小札甲という形式であることがさらに重要であり、この人物像を考えていく上でも大きな意味を持っています。

次にこの男性が暮らしていた5世紀後半という時期が大きなポイントになります。金井東裏遺跡が所在する榛名山東麓一帯では、この時期に非常に活発な動きが見られ、新しい地域展開があったことがわかっています。ちょうど同じ頃が、全国的にも有名な榛名山東南麓の保渡田古墳群や三ツ

寺I遺跡が成立した時期に当たります。保渡田古墳群の豪族は上毛野地域全体をリードするような立場にあったので、榛名山東麓の勢力もこれと歩みを共にしたことは間違いないところです。

なお、この5世紀後半は、日本列島を主導した畿内のヤマト王権と上毛野をはじめとする東国との間に、新たに極めて密接な関係が結ばれるようになった時期にも当たります。東国でその中心的な位置を占めたのが保渡田古墳群や、稲荷山鉄剣を出土した^{さきたまこふんぐん}埼玉古墳群の勢力だったわけです。

金井東裏遺跡の調査成果を見ていくと、この畿内と東国の新しい動きの中にしっかりおさまる特徴を有しています。以下、いくつかの問題から具体的に考えて見ましょう。

^{こざねよろい}小札甲をめぐって

男性が着装していた小札甲は、4世紀から5世紀にかけて使用されていた^{たんこう}短甲と呼ばれる種類から交替した新しいスタイルのものです。身に付けた時、短甲よりも小札甲の方が機動性に富んでおり、武具として大幅にすぐれたものになっている点が特徴です。小札甲は5世紀中頃を前後した頃には登場しますが、しばらくは短甲が主流で、両者の主客逆転は6世紀になってからです。

金井東裏遺跡の例を除くと、小札甲が発見されるのは古墳の副葬品に限られています。全国的な出土のようすを見てみると興味深いことが明らかにされています。すなわち、まだ広く普及していない5世紀後半の段階で、上毛野地域の出土数が全国一を誇ることです。出土した古墳は、前方後円墳か、それに準ずる有力古墳です。

ところで、この甲の製作には、最新の非常に高度な技術力が必須でした。それゆえ、その生産は当時の最先進地域であったヤマト王権のお膝元の畿内で独占的に行われたと考えられています。ヤマト王権が上毛野地域に重点的に最新の武具をもたらしたことを注意する必要があります。保渡田古墳群はもちろん、今回榛名山東麓の勢力も所持していたことがわかったわけです。

ちなみに、6世紀になっても上毛野地域の小札甲出土数は全国一です。と同時にその他の東国の諸地域からも数多く認められるようになる点に注意されます。ヤマト王権の軍事的基盤の一翼を担う地域として東国との関係を一層強めていっていることがわかります。



保渡田古墳群全景
手前が井出二子山
奥が保渡田八幡塚
高崎市教育委員会

5世紀後半の畿内と東国

5世紀後半の畿内と東国の密接な交流を可能にしたのは、馬の登場により内陸ルート(後の東山道駅路に近いルート)で結ばれたことが大いに関係しています。馬はもともと日本列島にいた動物ではなく、5世紀になって朝鮮半島からもたらされたものです。馬の登場は、現代の自動車に匹敵するほどの一大革命でした。ヤマト王権が積極的に導入・生産に当たったことは言うまでもありません。馬の先駆的な生産遺跡が大阪の河内地域で数多く見つかり、朝鮮半島からの渡来人の従事が知られています。

その馬生産が東日本にいち早く伝えられたのが、信州の伊那谷(飯田市周辺)と上毛野地域の西部と考えられます。5世紀後半の時期、榛名山東南～東麓一帯に朝鮮半島系の遺物が多く確認されることから、馬生産に従事した渡来人の存在を物語る可能性が指摘されています。その普及ぶりを如実に物語るように5世紀後半の上毛野地域の有力古墳からは、小札甲とともに馬具が数多く確認されています。この動きにヤマト王権の積極的な意図が作用していたことは間違いありません。



剣崎長瀬西遺跡出土の半島系馬具
高崎市教育委員会

5世紀後半の榛名山東麓

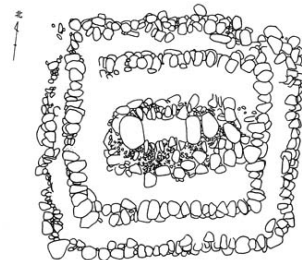
榛名山東麓で、金井東裏遺跡と同様の6世紀初頭の榛火山灰層下の遺跡が発見される機会は限られています。対象地が渋川市街地の真っ直中に当たっていることもありますし、軽石層とその下の火山灰層まで深く掘削するようなことがない限り発見されないことも原因しています。

そこで、数は少ないですが、この地域で見つかった注目される事例を、古墳を中心に尋ねてみることにします。

坂下町古墳群は、金井東裏遺跡の南東2.2kmに所在し、5世紀後半に属しています。全部で6基が確認され、1～5号墳は一辺が2ないし3mの長方形に川原石が低く積まれたものでした。その中心から人体がギリギリ入る竪穴式石槨が見つかり、これらから少し離れた6号墳は一辺が約5mの2段構造の方墳で、明らかに前の5基の上位に位置するものと考えられます。

この坂下町古墳群からさらに南東に少し下ったところで、同じ火山灰層下から東町古墳の方墳あづまちょうこふんが見つかり、調査所見では、一辺が約5.8mとされていますが、この部分は2段構造の上段に当たり、その下に一回り大きい下段が埋まっている可能性が強いところです。この古墳には、数多くの埴輪がめぐらされていたので、坂下町古墳群の上位に位置することは間違いありません。

これらのすべてが方形原理の墳丘である点には注意する必要があります。同じ時期の上毛野地域を広く見渡した時、古墳の大半が円墳だからです。今のところ、同じ時期で方墳が見つかり、高崎・渋川市域に限られています。しかも、

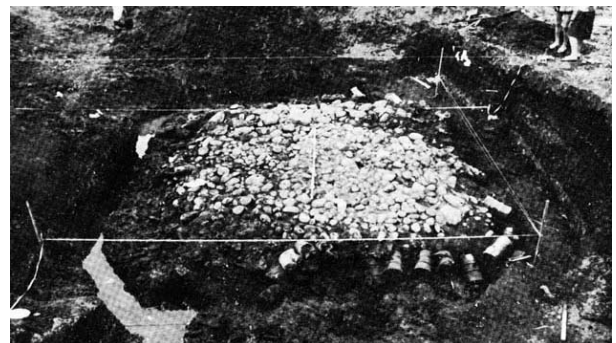


坂下町古墳群6号墳
『北群馬・渋川の歴史』北群馬渋川の歴史編集委員会

その代表的古墳である高崎市剣崎長瀬西遺跡の古墳群や同下芝谷ツ古墳しもしばやつこふんの方墳からは半島製の遺物が見つかり、どうやら、在地勢力が円墳を造ったのに対して渡来系集団が方墳を造った可能性が十分考えられるのです。

金井東裏遺跡の周辺には、同じ時期に渡来系の集団が居住していたことが考えられます。だからといって今回の小札甲着裝男性を、渡来人と限るわけにはいきません。これら渡来人を受け入れた在地勢力が確実にいたことも確かだからです。いずれにしても、この男性が渡来人と深く関わる立場にあったことは間違いありません。

金井東裏遺跡の調査は、その途上です。今後、小札甲を着裝した人物について様々なことが明らかにされてくることでしょう。より正確で具体的な人物像が語れるようになる日を待ちたいと思います。



東町古墳全景
『群馬県史 資料編3 原始古代3』群馬県



あらたな古墳時代像がみえてくる ～金井東裏遺跡の期待と課題～

よろい
甲を着たまま被災した古墳人の出現は、榛名山の火山噴火が周辺環境を変えたばかりでなく、当時の人々に直接的な被害が及んでいたことを実感させてくれました。

しかし、この人物は火砕流から逃げ惑う姿としてではなく、逃げるには不向きな重い鉄製のよろいを装着し、火砕流が向かってきた方向を向いて亡くなっていたのです。近くからは鉄鏃とよろいの部品が、さらに東側には乳児骨も見つかっています。このような状況からどんなシーンが描きだされるのでしょうか。

第一報では、荒ぶる山の神を鎮める祭りの最中に被災したのではないかという可能性を考えました。『常陸国風土記』には、継体天皇の時代のこととして、谷の開墾に抵抗する夜刀の神に対して、よろいを身につけ矛で立ち向かったという記事があります。金井東裏遺跡の状況を説明するのにとても魅力的な解釈といえます。

しかし、結論を急ぐことはできません。発掘はまだ継続中。さらに隣接する地域の発掘調査も将来的に進められていくはずです。

それに何よりも甲を着た古墳人の本格的な調査はこれからなのです。その結果によって、新たな解釈を求められることになるはずです。

金井東裏遺跡には、少なくとも5世紀後半以前のムラがあったことがわかっています。それが、榛名山が噴火した6世紀初頭にはムラはなくなっています。なぜそのムラは廃棄されたのでしょうか。その後はどのような場所となっていたのでしょうか。

甲を着た古墳人が倒れていた31号溝は、自然河川なののでしょうか。それとも何らかの目的をもって掘られたものなののでしょうか。解決しなければならないことは山積しています。

しかし、今後の発掘調査によって1歩ずつ解明していきたいと思います。榛名山の噴火前後の古墳時代像を復元しながら、甲を着た古墳人がよみがえることでしょう。

さあ、明日からこの難問に挑戦していきたいと思います。

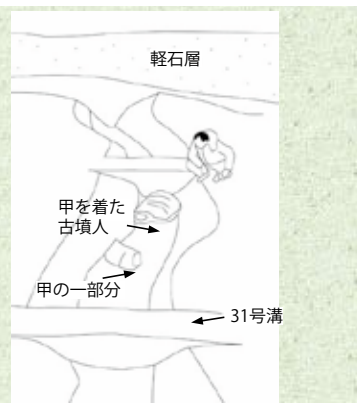
これからの調査にご期待ください。

(資料統括 桜岡正信)

表紙解説

中央に見えるのが甲を着た古墳人が発見された31号溝。白い壁の部分が6世紀中頃の榛名山の噴火で積もった軽石です。この溝は、さらに古い時期に起こった噴火で埋もれていました。溝の横に屈んだ人の前に見えるのが甲を着た古墳人です。

(桜岡正信)



本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課までお願いします。

「埋文群馬」No.57
平成25年3月28日発行
編集・発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橋町下箱田784-2
☎0279-52-2513
印刷 上毎印刷工業株式会社